

帰国後の子女教育に対する悩みと提言

— 私の息子の場合 —

藤 田 將 之

原稿依頼を受けましてから、月刊誌である海外子女教育に記載されている随想を参考に読みましたが、皆様が、いかに帰国後の子女の国語教育の立ち遅れをキャッチアップし、国内の中学生に伍して高校課程に進学させるべきかに、ご苦労されているかを知りました。と同時に、私たちの悩みが、いかに普遍性を帯びたものかにいまさらながら驚き、以下、できるだけ忠実に、私たちの子供の場合（次男は小学低学年で、問題も比較的少ないように思われますので、長男に焦点をおいて）をご報告し、何らかのご参考になればと、あえて筆を進ませるしだいです。

○

子供たちが初めて外国の土を踏んだのは、一九七一年六月、私の赴任地、ニューヨークでした。当時長男は五歳四か月、次男は一歳と八か月でした。その後六年八か月が経過し、いまだ私の駐在任期は終わっていませんが、今年二月末に、家族の先行帰国をさせる決意を致しましたのは、帰国後の教育問題（特に長男）があったからです。

家族にさきがけて赴任した私が住居を設営した場所は、マンハッタンから通勤に一時間程度要する郊外の、ホワイト・プレーンズでした。あまり日本人家族が隣り合わせていなく、アメリカ人の生活環境の中に入って生活すべきだという日ごろの私の主張どおりに、百世帯あるガーデン・アパートの中で、日本人家族はあと一所帯のみでした。長い冬から明け、暑い夏が一足飛びにやってくる直前の、さわやかですばらしい六月の季節は、日本では経験のできないものであり、初めて海外生活をする家族のアメリカの第一印象は、きわめて満足なものでした。

九月から入園の長男が、キンダー・ガーデンまでの三か月間、アパートや近所の子供たちとの遊びで学んだ英語は、その後の長男のアメリカでの生活上非常に役立ち、有意義だったと思います。その意味で、非常にスムーズなスタートを切ったわけです。学校に徒歩で数分のところにあるアパートまでの往復の妻の同行も、数日にして不要となり、同じ年ごろの子供たちとはしゃぎながら通学する毎日でした。日本の子供がいけないこともあって、長男は、

選択の余地なくアメリカの子供たちと英語で話さねばならず、また担任の先生の、親切で忍耐強いバック・アップもあって、彼のアメリカ生活への順応性は全く驚くべき速さで達成されてゆきました。

私は、従来から、教育は妻の担当分野と決めつけておりましたが、妻から聞くアメリカの学校の情操教育、子供の能力に応じたクラス分け、授業の進め方、カリキュラムは全て満足のゆくものでした。学校での成績も、年を追うごとに向上しました。そんなある日、子供がもらってきたクラスの記念写真を見て驚きました。二十数人のクラスで、黒人が六割も占めているではありませんか！

私は全く人種偏見論者ではありませんが、日ごろ、長男から黒人の子供が授業中に悪ふざけをして勉強に集中できないと苦情を受けていましたし、日本人であるにかかわらず私たちのところへ学校からPTA役員やらクラスマザーの依頼を何度も受け、ほかに適任がいるはずなのに不思議に思っていたやさきだけに、なにか不安めいたものが走り、早速担任の先生に会見を求めました。長年教育にたずさわり、いかにもベテランといった感じの黒人の女史は、私たちの訪問目的をじゅうぶんに予期されており、言葉を選びながらも転校をすすめる由の発言があったことは、たいへんショックでした。理由は、(一)学校区域が広まり、低所得者密集地もカバーすることになった。(二)夫婦共かせぎのため子供を日中預かるデー・ケア・センターのように思って、学校の集会・教育に関心のない家庭が少なくない。(三)学力水準は他校に較べ若干

低い、ということでした。

「勉強は環境も必要だが、なにより本人の心がけが大事である」ことを、日ごろ子供をしつける基本方針にしていた私も、少々うばいました。アパートの間取り、雰囲気や交通の便等、私本位に住居選びをした私の判断が甘かったわけです。アメリカという特殊環境にいて、それになじんでいかなばならぬハンデを背おっているわけですから、日本にいる時以上に、学校のできごと、子供の教育に関心と時間とをさくべきであったと反省しました。

熟慮の末、転校、転居することにしました。五年生から私学に入学させました。簡単な数学や語学を中心としたテストを受け、入校の手続きを終えました。

この学校は、幼稚園から高校三年までの一貫教育であり、全員大学進学する学校でした。いわゆるアイビー校へ毎年卒業生の二割程度を送り込む高率が、人気を博していると聞きました。転校後、以前の学校と比較しますと、(一)個性の発揮、創造性の発掘と育成を教育指導の基本方針としている。(二)広く国際的視野・体験を尊重するカリキュラムが組まれている。(三)十五名程度の少クラス編成。(四)父兄の教育理解度が高く、熱心である、等相違の大きさに驚きました。

現在六年生の長男は、途中入学のハンディも取れ、非常にのびのびと、勉強に、スポーツに取り組んでいます。昨年からラテン語を開始し、今年から第三語学の選択が始まるとがんばっています。このまま一貫して大学までアメリカで習得させたいと思いつきました。私の任期があと一年前後で終了し、帰国すると予知

される中で、長男を一人私の帰国後も滞米させることは、財政的にも慣習的にも考慮の余地がうすく、むしろ日本の中学校が開始する四月に間に合うように、小学校の卒業を断念して帰国させることに決定されました。

日本の教育の閉鎖性、国際化の立ち遅れが叫ばれ、乱塾時代の弊害が大きく社会問題としてクローズアップしておりますが、将来の日本社会での長男の進路（企業が国内大学卒を偏重採用する体制下など、短期的・長期的に展望すると、やはり常識的な物の考え方が頭をもたげ、一日でも長くアメリカにいたいと言う長男の望みを無視して、中一までに帰国させるのが日本教育に順応しうるギリギリの年代であるという先輩の言に耳を傾けてしまうのです。

小学二年の次男と競いながら、動機とニーズに乏しい漢字を暗記する長男が、疲れたからと中断してベッドに横たわりながら、アレックス・ヘリー著『ルーツ』の原本をおもしろそうに読んでいたり、鹿児島県という字と場所を覚えるのにたいへんなのに、ヨーロッパの孤島のことまで知っている、日本人としてはアンバランスな知識に遭遇するとき、複雑な気持ちになります。

「そよそよと吹く風」「はだ寒い秋の感傷」「寺とうつそうたる森」という表現から私が子供のころ抱いた情感や心にひびく感動はなく、寺は日本の教会みたいなもの、程度のタッチで理解する長男の中に、日本人の心がうせているのではないかと不安であり、子供にとって六年八か月の滞米は何を意味したのだろうかとか懐疑的にすらなります。

大内謙一氏が、一九七七年九月号の海外子女教育誌の中で、「帰

国子女受け入れ高校における展望」というテーマで、二つの提言をされている。一つは帰国子女の九月入学制であり、二つ目は国際化された大学進学適性共通試験の実施と出願資格制である。全く同感であり、賛意を表します。

私はさらに一つ追加提言したい。海外子女の高校推薦入学制の実施である。単に日本語のみならず日本の学校カリキュラムを完全に消化するには中学の三か年間で短かすぎ、むりやりつめ込むため、せっかく海外で培った貴重な知識や体験をほごにしてしまう傾向となる。これは個人のみならず、広く日本の大きな損失といわねばならない。高校三年までの六年間をかけ、海外で培った知識や国際理解、国際的視野を大きく培養させながら日本社会に順応させて行くことができないものだろうか。国際交流、国際主義教育を大きな特色とする同志社が卒先実行されるべく、前向きな早急なご検討をお願いしたい。

日本でじゅうぶんな国語教育を受け転校してきた生徒と、一日たりとも日本で通学の経験のない私の子供とは、日本語の理解度の格差はいかんともしがたいものがあります。日本語補習校で、下から数えた方が早い、漢字のテスト結果を配布された後、行った先生の質問に私の長男だけが、一人、「僕は死ぬまでアメリカにいたい」と言ったというその時の彼のくやしさが、帰国してどう増幅してゆくか、気がかりなのは私たちの家庭のみでじゅうぶんだと思うのです。

（米國ビーコン社派遣・取締役副社長・伊藤忠商事課長役・昭和三十六年大学法学部卒）

一 外人教師のみた同志社

B・D・タッカー

日本の大学とアメリカの大学の間には多くの相違があります。

アメリカの大学が九月に始まることは広く知られていますが、二つの国の大学の組織上の相違についてはあまり知られていません。日本の大学は各学部に分かれており、学生たちは学部の学科に入るために入学試験を受けなければなりません。入学を許可されますと、学生たちは一般教育における課程をとりませんが、その他は彼の学部のコースを、たいていとります。他の学部の講義をとることはあまり容易ではありませんし、一つの学部から他の学部に移りたいと思っても二年後でなければできません。

これに対してアメリカの大学では、そう学部別に分かれていません。すべての学生が一つの文科ならびに理科大学に入学し、入学してから学生たちは専攻を決めます。そして、その専攻を変更することは比較的容易です。大学内に各部ごとの枠がありませんから、学生たちは自分の専攻以外に自由にコースをとることができ、普通、その専攻ごとに必要な単位数が決められており、

専攻以外にいくつかの単位をとらねばなりません。しかし、いわゆる一般教育課程というものはありません。

日本の大学に比べてアメリカの大学では、学生たちがとるべきコースの数はずっと限られています。普通、学生たちは一学期に四つか五つのコースをとっています。一つのコースは、たいてい五十分間のクラスが一週三回もたれます。多くの場合、一つのコースについて一週に六時間から七時間の読書と研修のときが要請されます。あるときは、もっと多いときさえあります。それに比べて同志社の場合、一人の学生が一年に十五以上のコースを一度にとることはまれではありません。そして、一クラスの授業時間は一週に一回、九十分となっています。とくに、最初の二年間である一般教育課程において、この傾向は顕著であります。多少の例外はありますが、多くのコースは何らの読書や準備を必要としません。

これらの相違は、大学側の学生に対する期待にもあらわれてい

ます。よく、アメリカの大学は入学しやすいが、そこで勉強して進級することは難しいといわれています。実際には、よい大学に入学することは相当困難になってきています。しかし、大学に入学する場合、特定の入学試験を受けずに多くの大学を志望することができます。ですから、どこかの大学に入ることは、そう困難ではありません。それぞれの大学は、高等学校で行われる全国的なテストの成績と高等学校時代の成績と課外活動などを含めた、その他の要素の評価を基にして、学生を選考します。ある州では公立高校の卒業生にはその州の州立大学に入学する権利を自動的に与えています。しかし、大学に入りますと学期末のみでなく学期中にも多くの試験があり、多くの学生たちが一年の間に大学をやめてゆきます。それに比べて同志社では、学生が多くのコースを落としても、在学期間が八年になるまでは、何回も繰り返し返してコースをとり、卒業に必要な単位を整えることができます。多くのアメリカ人は、こうした寛容性を不思議に思っています。

＊

他の相違点は専門領域における細分化の問題です。アメリカの大学では、法律・医学・建築などの領域では、大学の四年の課程を終えて、さらに専門的研究・訓練をするそれぞれの大学院で学ぶことになっています。ですから、このような科目については、大学の四年の課程であったとしてあまりたくさんコースが設けられていません。その結果として言えることの一つは、日本に比べるならアメリカの方がはるかに多くの大学院の学生がいるとい

うことです。そして、大学ということばも、一つないしは複数の大学院を有する機関を指していられています。

同志社では、最近学生と教授陣の国際交流をはかるように検討がなされています。アメリカと他の国ぐにの教育制度が違うために、当然いくつかの困難な点がありますけれども、しかし、それらの多くの点は克服可能なものであると思います。決してその数はあまり多くはありませんが、すでに同志社には外国からの留学生がいます。また、外国から同志社に来て教鞭をとっている人もいます。今日の世界では、一つの国から他の国に行くことがわずかな時間、あるときは数十分で可能になってきています。こうした時代にあつて、同志社をもっと国際的な大学とするためにはどうしたらよいのでしょうか。

言葉の問題が、まず克服されるべき最も難しい問題であります。四年間の大学の研修のためには、日本語の修得が必要であります。国際基督教大学では、日本語を習得したことのない外国人の学生は、最初の一年間に集中的に日本語の勉強をしなくてはなりません。同時に、日本の学生たちは、一年間英語の勉強を集中的にしなければなりません。こうして、原則としては、外国人学生は日本語でコースをとり、日本人学生は英語でもコースをとることができることになっています。だいたいこの試みはうまくいっており、もちろん全く問題がないとは言えませんが、比較的高い水準の国際化が実現されているようです。

同志社がいますぐこうした国際化の水準に到達しようとは思いません。しかし、集中的な語学研修のプログラムはアメリカでも

よい成果をあげておりますし、それを外国人学生ならびに日本人の学生に適應してみることは考慮に価することと思います。同志社が上智大学のように特定の国際学部を設けるのなら、そこでもっと多くのコースが英語で開設され、あるいは英語で読書の学習指導がなされ、さらにレポートも英語で書くことが許されるようになると思います。

現在、アメリカの九つの大学が協力して行っている A K P (Associated Kyoto Program) では、二十人の学生たちが一年間同志社に学び、教授たちの指導の下に、日本の歴史、文学、芸術などについてのコースをとっています。これらのコースは、同志社の教授たちによって英語でなされています。これらの学生たちは、同志社で学んだ成績は彼らに必要な卒業単位として認められることになっています。A K P の学生たちのプログラムは、同志社の一般のカリキュラムに含まれていません。彼らは、同志社大学外人留学生として登録されています。彼らが同志社大学の一般の学生たちといっしょに、一学期に一つあるいは二つのコースをとって、共に学びあい、相互の交流を深めることが望まれています。そのようなコースは、英語と日本語の二つの言葉を使ってなされるとよいと思います。多くの学生たちは、これらの言葉でじゅうぶんに表現することは難しくても、聴いて理解することは可能であると思います。

同志社は、さらに、同志社の学生たちが外国で勉強した場合に単位を与えることを考えるべきだと思います。同志社大学に学ぶすべての学生たちは、二回生を終える段階では、少なくとも八年

間英語の勉強をしたことになります。ですから、一年間の海外における留学の機会を与えるならば、必ずしもよい結果をもたらすと思います。今日の制度では、海外に留学しても、そこで得た単位を同志社大学は認めていません。しかし、わたしは同志社が A K P の学生を受け入れているように、いくつかの海外の大学と交流プログラムをつくり、履修した単位を認めようにはかるべきだと思います。もちろん、そこにはいろいろな困難な問題もあると思います。しかし、同志社はそれらを克服して、国際交流をすすめてゆくことができると思います。

今日、同志社大学では国際交流委員会が設けられ、外国からの留学生たちを大学院においても、また四年間の大学の課程においても受け入れるように準備しています。もしも、読書の指導やレポートや試験が、英語または他の外国語でなされるならば、国際交流のプログラムを促進することと思います。国際交流によってうける利益は、規則に多少の例外を設けることによって失うものよりもはるかに大きいと思います。同志社は有能な外国人学生が学ぶのに魅力ある大学とする必要があります。もちろん、外国から来た学生たちは、日本語を学ぶ努力を惜しんではならないと思います。しかし、同志社は進んで彼らを迎える努力をなすべきであると思います。

最後に、同志社は、世界中から優れた人材を求めてよい教授をそろえるように、努力する必要があります。英国ならびに米国の大学の特色の一つは、世界中から最も優れた教師や学者たちを招いてくるということです。必ずしも、彼らのすべては英語

にたんのうではありません。しかし、その専門の領域においては、学生や教師たちと意思の疎通をすることができずし、研究や教育の課程に非常に大きな貢献を果たすものであります。このような教授陣の国際交流は、日本という文化の発達した国にある優れた大学の一つである同志社大学にとって、きわめて重要なことであります。

今日でも、英語の講義をだいたい理解しうる日本の学生たちが、かなり多くなっています。もし、彼らがその領域における最も優れた学者の講義をきくようになるならば、学生たちは刺激を受け、実力が増進することと思います。

今日、英語は国際語となっていますが、学生たちは英語で読むことはかなりできても、英語を用いる機会がほとんどないために英語によってお互いに意思疎通をすることができない状態です。多くの国々の学者たちは、短期間であれ、長期の滞在であれ、日本に来ることに大きな魅力を感じています。京都という古い日本の文化の中心にある大学として、同志社はその能力を遺憾なく發揮して、真の国際的な大学を形成すべきだと思います。多くの可能性があります。また、いくつかの障害もあると思いますが、同志社が勇気をもってそれらを克服し、第二世紀を迎え、名実ともに特色のある国際的な大学となるように祈ってやまないものであります。

(大学文学部教授・二十世紀アメリカ小説研究)

(訳・竹中正夫)

同志社関係出版物

新島 襄 (岡本清一著)	同志社大学出版部	五〇〇円
新島 襄 (魚木忠一著)	〃	三〇〇円
新島襄の生涯 (北垣宗治訳)	小 学 館	八五〇円
回顧七十七年 (大塚節治著)	同 朋 舎	六、〇〇〇円
髪の掠奪 (岩崎泰男訳)	同志社大学出版部	一、〇〇〇円
同志社歳時記 (生島吉造・松井全編)	〃	六〇〇円
〃 (続)	〃	七〇〇円
同志社設立の始末 (新島 襄)	学校法人同志社	一〇〇円
同志社大学設立の旨意 (新島 襄)	〃	三、〇〇〇円
同志社九十年小史 (社史々料編集所編)	〃	五〇〇円
同志社歌集	〃	二一〇円
新島襄書簡集 (编者代表・住谷悦治) 岩波書店	〃	七五〇円
同志社で話したこと書いたこと (久永省一著)	洛 北 書 房	七五〇円
写真集「同志社一〇〇年」 (学校法人同志社)	〃	七五〇円
豪華上製本 (二、〇〇〇円)・並製本 (九、〇〇〇円)	〃	七五〇円
写真集「同志社―その一〇〇年のあゆみ」 (学校法人同志社)	〃	七五〇円
上製本 (一、二〇〇円)・並製本 (七〇〇円)	〃	七五〇円

送料は別

取 扱 ・ 同志社収益事業課

A・K・Pと同志社の国際性

山下 忠 規

同志社の今出川キャンパスおよびその付近では、二十歳前後の外国人をよく見かける。たぶん、その人々は同志社大学のA・K・Pの学生であろう。A・K・Pとはいったい何なのだろうか。A・K・Pとは、Associated Kyoto Program の頭文字をとったもので、アメリカの九つの大学で組織された団体で、同志社大学の協力を得て、毎年二十四、五名の留学生を同志社大学に送り、ここで日本語や、日本に関係のある課目を勉強させる機構である。九つの大学は、アモスト、カールトン、コルビー、

コネティカット、マウントホーリヨーク、オバリン、ウェスレアン、ウィリアムズの諸大学で、いずれもアメリカ小大学の名門校で、いわゆるエリート学生の集う大学である。この九大学の教授の中からA・K・Pの所長が選ばれる。今年はマウントホーリヨークにその番が回っている。

A・K・Pに対して同志社大学側は、大いなる理解を示し、できる限りの協力をしている。同志社大学の教授陣や職員の中にも、これら九大学に留学した人々の多いこともあって、これらの人々を中心に、

最善の受け入れ体制を作っている。歴史的な由緒の深いクラーク館にA・K・Pの事務所を与え、昨年からは教務部学事課に国際係を設け、大学の事務関係の窓口を作っている。同志社の学生も、今のところは全く個人の知り合いを通じてではあるが、A・K・Pの学生と深い友人関係を結び、英語、日本語の交換教授とか、クラブ活動や同好会等を通じて交友を深めている。

A・K・Pの学生の大部分は、日本の家庭に同居させてもらう、いわゆるホームステイをしているが、この分野では、大学のみならず、高校、中学の卒業生および父兄のかたがたが、なみなみならぬ協力を惜しんでいない。

このようなA・K・Pの同志社における存在は、同志社の国際性になんらかの寄与をしているのであるが、その機動力となるものは何であろうか。一番手短に感ぜられるのは言語であろう。たしかに同志社の国際性というものは、創始者を始めとして、主として英語のたんのうな人々によって築き上げられてきた。現在では英語教育の普及

と海外旅行の簡易さもあって、同志社内

英語に不自由を感じない人も多くなり、これらの人々が国際交流のために貢献していることは事実である。しかし、国際性とその基礎になる国際文化交流というものは、英語のたんのうさと同一のものではない。

A・K・Pの学生は日本語の勉強のために、全カリキュラムの半分以上を費やし、多くの者が日本語上達を留学生活の最高目標としている。中には、日本語でほとんど何でも事がすむばかりか、かなり難解なまでの理解できる人もいる。しかし、彼ら全部が、日本語で何でも用が足りるとしても、事実、そこまでは遠い距離があるのだが、それで彼らの国際交流の目的が達せられたのではない。たしかに、英語、日本語の交換教授のようなものを通じてお互いを利用し合い、そこから生まれてくるかもしれない深い友情関係の可能性をみつめることはよいことだ。しかし、同志社の国際性というものは、そんなものよりずっと高いところになければならない。ある意味では、もともとずっと基本的なところになけれ

ばならない。

ちょうど、赤子の、言葉になっていない声を、親がすぐに理解できるように、言葉以前に心がある。そして心があるところには必ず言葉が生まれてくるのである。又、一方、言葉はできても何も勉強してこなかった学生が白紙の答案しか出せないように、言葉以前に思想があり、感情がある。そして思想と感情がある所には必ず言葉が生まれ、詩が生まれるのである。そしてここで生まれた言葉と詩が文化となり、多くの言葉、多くの詩があれば、自然に国際文化交流が生まれてくる。

言葉と詩の多様性を思うとき、国際性というものは日米交流だけではないことも同時に考えるべきである。A・K・Pはたしかにアメリカの九大学であり、同志社は日本にあるのだから、日米交流が主流であるのは当然である。しかし、我々の視野はもっと広くなくてはならないと思う。事実、現在のA・K・Pの学生の中にも、欧州で勉強した経験もあり、独・仏・西・伊語等にかなりたんのうな人もいる。A・K・P

の学生の多くは、日本の専門家になるために来ているのではなくて、大学一般教養課程の一環として日本のことを学んでいるのである。日本に来て学ぶことによって、人類全般の理解を深めることが彼らの目的である。同志社側としても、留学生はA・K・Pに限らず、広く世界中から来てもらいたいし、その体制を作りたい。ことにアジアの近国からの留学生にはかなり注目している。ここにも言語の問題はあるし、それ以上に世界政治の権力関係が障害となる。ここでも人間の心と詩とが基本的な国際性の鍵であろう。ケネディー大統領がアーモスト大学でした演説が思い出される。

『権力が人間を傲慢に導く時、詩は人間に自己の限りを思はしめる。権力が人間の関心の領域をせまくする時、詩は人間に自己の存在の豊かさや多様性を思はしめる。』

(A・K・P 所長、マウントホーリヨーク大学教授)

梅花学園百年の歩みと同志社

茂 義 樹

梅花学園は、明治十一年（一八七〇）一月七日梅花女学校として大阪土佐堀で開校式を行って以来、今年で満百年を迎えた。梅花女学校開校は、当初、京阪神に一つずつ女学校を開設したいとのアメリカン・ボード宣教師たちの意向もその設立動機に反映されてはいるが、なによりも大阪の会衆派教会である梅本町公会（大阪教会、明治七年設立）と、浪花公会（同一〇年設立）の会員によって、女子のための教育機関として創立されたのである。創立の中心人物は、浪花教会牧師沢山保羅、宣教師H・H・レビット、浪花教会員前神醇一、同成瀬仁蔵らであり、彼らは、いずれも、日本の教会は日本人の手で運営され、その経費も日本人によって賄われるべきであると考えた自給論者であった。この点において、同じ会衆派教会に関係するにしても、神戸英和女学校（神戸女学院）はアメリカン・ボードの直営、同志社は自治を標榜しつつも新島襄を媒介としてボード資金を得ての運営、そして梅花は宣教師の派遣を

得たのみの自治・自給の学校として、三者三様の運営形態を探ったのである。沢山保羅は、教会も、学校も、また同十一年設立の日本基督教伝道会社（当時の会衆派教会が連合して伝道に当たる機関）も独立自給の方針を貫こうとしたが、これは彼の純粋な信仰から出た決断であった。

梅花女学校（以下女学校という）は、開設早々経営難に見舞われ、借家を転々としたり、存続の危機に幾度か遭遇したが、この女学校を支えたのは、大阪、浪花に加え、後に設立された天満（同十二年設立、島之内（同十五年設立）の諸教会からの物心両面の支援であった。教会合同の祈禱会、親睦会のたびに女学校への献金が募られ、信徒の最も敬愛する指導者沢山保羅を校長（在任 同十六・二十年）として仰ぎ、女学校はその体裁を整えていった。沢山校長時代から明治二〇年代にかけては、建物も教育的内容も充実し、伝道会や共励会等のキリスト教活動や、文芸活動も盛んであった。



梅花学園の校舎風景

後者では雑誌「梅花余香」が発刊(同二年)され、その後同誌を発展させ、同志社、神戸英和等の女学校を加え、文芸雑誌「つば美」が刊行(同三年発刊)されるに至った。

創立時から明治までの女学校は、教会とともに歩む学園であった。沢山保羅の没後、校長は大阪教会牧師宮川経輝(在任明治

二〇―二五年)、天満教会牧師三宅荒教(同二五―二七、二九―三五、成瀬仁蔵同二七―二九年)、天満教会牧師長田時行(同三六―四四)が歴任した。彼らは成瀬(彼も按手礼を受けてはいるが)を除いてはすべて同志社出身の牧師であり、それぞれ教会を牧しつつ校長を務めた。また、彼らは日本基督伝道会社の委員または社長であり、大阪基督教青年会(YMCA)や共励会を起こし、また運営した。彼らはキリスト教界の偉大なリーダーであり、彼らの指導によって女学校は保守反動期の経営苦難をも乗り越えることができたといえよう。一時女学校の運営主体(理事会)を大阪教育社(明治三十二年、社長本間重慶↓前神醇↓宮川経輝)と称したが、このねらいは単に梅花のみならず、他の教育機関の運営も行おうとの試みのようである。あるいは男子校泰西学館(設立明治十八年、廃校同三十一年)を、梅花とともに運営する意図をもっていたとも推測される。

沢山の一番弟子であった成瀬仁蔵は、アメリカ留学から帰国後女学校の校長に迎えられたが、女子大学設立構想を発表し、教育社と女学校、教会の賛同を得られず、校長を辞し東京へ去った。

明治四四年、女学校は校長を伊庭菊次郎に委嘱した。伊庭は以後四〇年近く(昭和三四年まで在任)校長を務め、この間に梅花女学校の性格は大きく改変した。良くも悪くも創立以来の教会との関係は改革され、純然たる教育機関としての存立が中心課題となった。伊庭は同志社卒業後牧会に当たっていたが、さらに東京高等師範学校を卒業、各地の中学校教諭を歴任し、梅花に招かれたのである。伊庭は梅花の教育の制度的充実に着手し、高等女学校(大正二年、女子専門学校(大正十一年)を開設し、女学校を廃止し

た。当時、多くのキリスト教主義女学校は、勅令三一号高等女学校令および文部省訓令十二号（いずれも明治三二年発令）による宗教教育禁止条項のため、女学校を高等女学校に移行することを拒否ないしはちゅうちょし、建学の精神の重要性の方を選びとったのである。しかし、伊庭はあえて教育制度の拡充を選び、キリスト教教育は、放課後の伝道集会、共励会活動、梅花教会の設立（昭和二年）といった代替処置を設けたり、法人を梅花女子専門学校（キリスト教主義）として、それが非キリスト教主義の高等女学校を経営するという形態を取らせたりの苦心をしている。

この間、学校は建学の地土佐堀を校地狭隘のゆえに北野に移転（明治四三年）し、同地が湿地で周辺が工場地帯になったことから、さらに豊中に移転（大正十五年）した。現在の梅花に百年の重さが見受けられないのは、同志社にあるような、創設期の校地や建物が見られないことにも一因があろう。移転によって財政は極度に悪化し、教職員はかなり犠牲を強いられた。戦前の梅花での教職員の勤続年数が極端に短いのも、経営情勢の悪さと、長年に及ぶ伊庭体制に起因するといえよう。

せっかく戦火を免がれた梅花であったが、昭和二〇年の失火による校舎被災は、戦後のスタートに大きなつまずきとなった。新しい学園長・学校長に、実生すぎ（梅花女学校―神戸女学院―ミシガン大学卒業。Ph・D。在任 昭和二四―三二年）を迎えたが、五科あった女専を短大英語科に移行するのが精一杯という、苦しい新制への切り替えであった。中学校で試みられた男女共学も一学年で打ち切られた。（同窓会員に数名の男子を数えるのはこのためである。）

昭和三十一年には同志社大学文学部民秋重太郎教授（九州大学卒業）を学園長に迎え、遅ればせながら戦後の復興期に入った。鉄筋校舎やプールの建設、定員増、学科増が行われ、三九年には茨木の地に念願の女子大学が開設された。

昭和四十一年に元同志社女子大学片桐哲学長が学園長に就任したが、このころより建物新築等による借財に迫られ、学園財政は急激に悪化し、昭和四五年には財務理事の過誤から経済危機に見舞われたことは記憶に新しい。教職員は賞与のカットや遅配、予算の執行停止の中で教育、研究活動を続けつつ、再建委員会を組織し、自らの学園の経営に当たろうとした。翌年、大阪初芝学園柳泰胤校長に経営助力を仰ぎ、再建計画に臨んだ。この時期に、教職員は自制、忍耐、そして自治の能力をも問われた。各学校は独自に学校長を戴き、あるいは選出し、各校で人的、制度的整備がなされた。

昭和四八年には上野直蔵理事長・学園長の就任を迎え、以来教育活動の充実期に入り、学科増、定員増、大学院開設等が将来を考慮しつつ慎重に実施され、教育面、経営面に希望を持ちつつ百年を迎えるに至った。

現在は幼稚園から中学、高校、短大、大学、大学院まで学生・生徒数四、三三名、教職員二四三名の中規模の学園として、女子教育の現代的意義や、キリスト教教育の可能性とか、特徴ある教育活動のあり方を問いつつ、二百年をめざして歩もうとしている。そこには三四名の同志社人が与えられた任務に励んでいる。

（昭和三十八年大学院神学研究科修了、梅花短期大学助教授）